

---

**仮題 弥也子～美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ塩野弥也子～**

かとう みき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮題 弥也子と美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ塩野弥也子

### 【Nコード】

N1100Z

### 【作者名】

かとう みき

### 【あらすじ】

姉の結婚は失敗だった。

いや、姉の態度が問題なのだ。

10才の子供が冷静に観察して、ゆっくりと成長する。

反面教師の存在は確かに効果があり、少女は賢い結婚をしたが、恋心が介在すれば困惑する事ばかりだった。

子供時代長いです。

成長してからは、お約束的なプチハーレクイン目指しますww

猫被り姫終了後のメイン候補その2です。

## 1話 反面教師

姉の結婚は失敗だった。

ありがちな事だけれど、家柄と財産から選ばれた結び付きで、姉が愛された訳では無かったのだ。

とは云え、義兄も同じように思っているだろう。

お互い様だと。

私を見るところそうではない。

姉は確かに義兄を愛している。唯、自尊心が邪魔をして、素直になれないだけだ。

義兄の浮気に傷付いて、恨んで、それでも何も云わないのも、同じ理由からだろう。

端から見る限り冷えきった夫婦で、まさしく政略結婚の成れの果て、と云うに相應しい。

けれども私に云わせれば、彼らの失敗は政略結婚の所為ではなく、彼ら自身の行動の不味さだったと思う。

確かに、義兄は現在姉に対して愛情を抱いてはいない。どうひいき目に見たって、それは動かしようのない事実だろう。

でも当初は違う。彼は自分の妻になる女性に惹かれていた。そして彼女が恋人と引き裂かれて自分と結婚させられた事を知った時も、彼女の頑なさの事情が解つたと云って落ち込みはしたけれど、却って愛情は深まるようだった。情報提供者の私にフルーツパフェをご馳走してくれ乍ら、彼は云ったものだった。

彼女を幸せにしたい、と。

けれども人はいつ迄も待てないし、実家の権威を振りかざす妻の態度に、彼が疲れたのは仕方がない事だった。

月に一度か二度、美味しいお菓子や面白いゲームに依って買収され続けた私も、それに気付かない訳でも無かった。

そして、それはいつの間にか買収の意味を為さなくなった。

度々逢えば親しみも増して、彼は私を実の妹の様に可愛がる様になった。反比例する様に減ったのが、姉への愛情である。

彼が、他の女性に慰めを見出だす頃、姉は彼を愛する様になっていた。

皮肉な話だ。

内緒だと云い乍ら、月に2〜3回しか逢わない義兄の話を、義兄と暮らす姉に尋ねられる。同じ様に、食事や服で釣られて、私は協力したものである。

如何な幼い私でも、彼らの行き違いの原因が、那边に有るかくらいは理解した。

普通に云えば良いのに、と姉に云って。

姉は意地を張ってるだけだと、義兄に伝えた。

どうして二人共、心に思った事を云えないのだろう。

思ったままを云わないにしろ、お互いに満更でもないなら、優しい素振りひとつで、ずっと物事は変わってくるのに。

姉はどうしても素直になれなくて、義兄の心は益々離れた。そしてある日、姉は泣いて帰って来た。

私が十歳の時の話だ。

何だか家の中が騒がしい気がして、私は寝台から起き出した。

時計を見れば11時だった。

夜更かし好きの私だったけれど、その日は9時に就寝したから、寝過ごしたとしても午前中の筈もない。

それに、起こすなと云われない限り、日曜とは云えメイドは9時には声を掛ける。

やはり夜の11時だろう。だが、この時間に相応しくない喧騒は何事だろうか？

何やら人が叫んでいる様な声が聞こえてきて、言葉は聞き取れない迄も、好奇心ですっかり目が醒めてしまった。

階下に降りると、声は更に明瞭になる。

居間の辺りかと思当をつけて向かえば、泣き声に近いそれが、姉のものを知れた。

「まあ。お嬢様……」

困惑混じりに、どうしようかと室内を伺う由紀に構わず、私は開いたままの扉を潜り抜けた。

「お嬢様。お起こししてしまいましたか……」

「ん。私にもお茶。」

若いメイドとは違い、私が生まれる前から家に居るフミ江は、直ぐに立ち直って横に立ち尽くす春加に頷いた。

「弥也子。」

「うん。」

近くまで行けば、姉は私を抱きしめた。

嗚咽に震え、しがみついてくる軀を何とか受け止め、私は宥める様に背中をさすり、腕を伸ばして髪を撫でた。

小さな子供みたいに、しがみついてくる姿は、常の姉とも思われず、私は溜息を零しそうになる。

「大丈夫。誰もね、此処では姉さんを悪く思う人も、傷付ける人も居ないの。大丈夫よ？」

母が生きていた頃、何かとよく泣いた私を慰めた台詞が口をついて出た。

「大丈夫よ。」

姉も、母に云われた覚えが有るのだろうか？しがみつく力が増した。

抱きしめられてるって体勢なのだろう。だが、しがみつかれているとしか云い難い、姉の様子だった。

「弥也子……もう駄目なの……」

「うん。」

「どうしてえ？」

「うん。」

この場合、下手な事を云うと益々話は拗れるだろう。

私は本当に『何であんなに泣いたんだろう？』ってくらい良く泣いていた頃でさえ口の立つ子供だった。故に、泣きじゃくる相手が落ち着く迄は、とにかく逆らうべきではないと知っていた。

取り敢えず、今の姉は先程より大分増しな状態では有るらしい。

周囲の使用人達の、胸を撫で下ろす様子に、どれ程手が付けられなかったかを悟り、姉の事乍ら羞恥を覚えた。

フミ江に目配せをすると、心得た様に必要外の者を下がらせてくれた。

「姉さん。紅茶が来たみたいよ？暖かくして寝るのが良いよ。」

どんなに悔しい事も、哀しい事も、暖かい飲み物と睡眠を摂れば、大分気分は静まるものだ。

「寝れやしないわよ！」

そんなに簡単な事では無いと告げる態度にも、私はニツコリと笑った。

春加がうるたえるのを手で制して、お茶を催促する。

「うん。それじゃあ暖炉に火をいれて、此处ですつとお話しよう。」

「……………」

「ね？」

もう一度笑いかけると、姉は頷いた。

私も、本当は執念深い性質だから、怒りの余りよく眠れない事が有る。



でも、いつかは眠くなる。

起きたらご飯食べて、学校行って、ご飯食べて眠って、繰り返してる内に、平気になる。

母が「その内に忘れちゃうわ」と云った台詞には、少しばかり裏切られたけれど、平気になったのは確かだ。

繰り返す内に、私は泣く事もしなくなった。

母が亡くなった時にも、同じ様にしてたら落ち着いたから、何が有っても大丈夫なのだと、今の私は思っている。

私の事を小生意気な子供ガキだと云う大人も居るし、心の中で思っている人は多分もっと多いだろうが、私は構わない。

亡くなった母も、生きてる父も、義兄や姉、友達……かどろかは解らないけど、学校の何人ものクラスメート達が私を好きだと云うし、私も私を好きだから。

「久しぶりよね。こうして二人で起きてるの。」

パチパチと木屑が爆ぜる音に、気持ちが和む。

何杯目かの紅茶を、両手でカップを包む様にして、姉はこくりと飲んだ。何処か、子供みたいな仕草だった。

「お酒の方が良いかも……。」

「ううん。少しだけ……そうね、お茶にいれて飲むくらいなら。」

この人は私の姉で、22才の年令よりも、本当はかなり大人びた女性である。少なくとも、周囲の評価はそうだった。

けれど、10才の子供である私と共にいると、時に子供に戻る人だ。そんな時、私たちの立場は逆転する。

正確には、私は常にエラソーだったりするので、逆転と云うのは

違うかも知れないけれど……。

「春加、ブランディ持って来て。そしたらあなたも休んで良いわ。」  
「ですが……」

姉の言葉に伺う様な視線が寄せられた。私が頷くと、安堵した様に首肯して下がる。

そんな春加の態度に、姉は少々拗ねた。

「普通、10才の子供の命令を優先する？」

「今の姉さんよりはね。」

「ひどい。」

ぶつぶつと文句を云う。人前では限りなく高飛車な人だけど、我が家でだけは子供に還る。

思えば、その点では私も似た様な性格をしているので、気をつけねば為らない。

この人が泣いて帰って来たのは義兄の事だろう。また浮気の事が、でなくとも余計な事を一言も二言も口にして、止まらなかったに違いないあるまい。

この点、物凄く理解出来る。

云い過ぎだと心で思うのに停止出来ない事はよく有る。

私は男の子をよく泣かせた。

もう止めなきやと思っても、見下した視線もそのままに、やり込めて踏みにじって、相手が泣いて逃げ帰る迄停まらないのだ。

その所為でしょっちゅう落ち込んだが、代わりに負けて泣かされるよりは余程増しだと開き直ったりもしたものである。

泣くのは、本当は凄く嫌いだった。

誰に云われずとも知っている。私は負けず嫌いだ。

小学校に上がったばかりの頃は、まだ泣き虫が残っていたが、それも負けず嫌いが原因の悔し泣きだった。

おまけに私は、女の子を泣かせるのは楽しくないが、男の子なら……いや、好きな男の子ならば、……むちゃくちゃ好きなのだ。いや、だから泣かせるのが。と云うより虐めるのが。

我乍ら困ったものだ。

しかし、自分で云うのもどうかと思うが、やはり私は美少女なのだ実感せずにおれない。彼らは泣かされても泣かされても、私に近付こうとする。

大体がして、最初に私に喧嘩を売って来るのも、好きな子ほど虐めたい子供心理のタマモノで、たまたま私がこういう性格だから虐め返してしまっただけの事なのである。

しかし……だ。

最近の私は考える。

このままではヤバイ。

いつか、私が姉の轍を踏まない保証は無い。

美貌だけで世の中が渡れないのは、姉を見れば火を見るより明らかだった。

おまけに、私の姉だけあって、この人は知性まで有するのに、失敗した。

いや。

今からでも素直に成ればやり直せるかも知れないのに、今更出来ないのだ。

自尊心の高さ故に。

私には理解出来ない事も有るけれど、それは違う人間だから仕方ない。

問題は。

姉の態度に、自分の未来が垣間見える瞬間だった。よく母も云っていたではないか。

「本当は、泣いた方が得な事も多いのよ？」

姉は泣けない。

今日だって、義兄の前では泣けなかつただろう。

それでは意味がない。

私にだって理解出来る理屈だ。

「姉さん。義兄さんに謝った方が……………」

この女は、けれど私とは違う。

将来の不安を抱える妹を前に、誰の所為で此処に居ると思っっているのか、安らかに眠れたりするのである。

「謝った方が、絶対自分の為よね。損して得取れって父さんが云うけど、本当にそうだと思うわ。」

嘆息して、私は執事の山本を呼ぶ為に、内線を繋いだ。

## 2話 7才児の失態が招いた現在

「お嬢様。9時ですが、どうなさいますか？昨夜は遅かったですし、もう少しお休みになりますか？」

「ん……………姉さんは？」

「……………その。そつとしておく様に……………」

フミ江が指示したのだろう。如才ないな。私は唸り乍ら頭を軽く振った。

「シャワー。」

「はい。」

由紀は未だ『賢しげな子供』である私に対して、態度を決めかねる面がある。昨夜みたいな時は従って良いのか解らないらしい。

だが、日常の世話に関してなら、完璧に近い働きをする様になってきた。

私の命令は、基本的に最低限の言葉しか無い。日常の事なら、単語のみの場合も多い。

最初の頃は大概のメイドが戸惑う様だが、フミ江の教育が行き届き、私の言葉からするべき事を見付けられる様に育成される。

用意された服に袖を通して、冷たいレモン水を干す。

シャワーを浴びた後には、炭酸かレモン水が欠かせないのだ。

二杯目のそれにストローを意味も無く掻き回す。カラカラと氷の鳴る音を聞くともなしに聞きつつ、溜息をついた。

天才だなんだと私をおだてる大人は多い。しかし、大人の恋愛は

理解を超える問題だった。

姉はそんな事は思っていない様で安心するが、世の中には好いた相手の為に命を棄てる様な女も多かつたりするのだ。

「莫迦みたい。」

「……………っ。」

一瞬手が止まったが、返答を求められた訳ではないと知れば、由紀は行為を再開した。

濡れた髪をタオルで挟むようにして、丁寧に水気を取り、痛まないう様に、細心の注意を払って髪を梳く。

これが彼女の一番大切な仕事なのである。

「壺は割れても替わりが有るが、私の髪に替わりはない。」

一度そう告げた事が有る。それ以来、この仕事の重要性を認識し  
たらしく、真剣に取り組む様になった。

「チーズオムレツ。ポテトサラダ、レタスに貝割れ。キュウリ。バ  
ジルのドレッシングは醤油系、少し唐辛子きかせて。別途マヨネー  
ズ。生ハム。パンはトーストとクロワッサン。プレーンヨーグルト  
も欲しいわね。」

由紀はチーズオムレツと告げた辺りで直ぐに、そつと髪から手を  
離し、素早くブラシを置いてメモを取った。うん。よし。

復唱も忘れず、私が領けば内線で注文を繰り返す。

「で、ドレッシングはそれとマヨネーズの二種用意して下さい。多  
分……………ちよつと待って下さい。」

多少、敬語が覚束ないのがご愛嬌かな。まあ、丁寧なのは確かだし、この程度ならおいおいで良いや。最近大分覚えて来たしね。正直云うと、ちよいちよい微妙な言葉遣いでウケる。フミ江頑張り。客人の前に出せる様になるまでは遠いよ。私は指導係に内心エールを送った。

由紀が振り返って質問を寄越した。

「お嬢様。マヨネーズはいつものにコシヨウ等混ぜるタイプで宜しいですか？それとも芥子マヨネーズ作りますか？」

「普通。タマゴ少し塊が多め。」

ん。やっぱり上達はしてるな。たまに合格点。

「それで宜しいそうです。タマゴの塊が……はい、そうです。はい。ええ、下でお召し上がりになります。あ……はい」

終わったかと思った通話が続く。

何やら相槌をいくらか打ち、由紀は通話をオンにしたまま、クラシカルな白と金に彩られた受話器を差し出した。本当に昔の電話なら当然切れているところだ。

「執事長がお話があるそうですけど。」

「何？」

「料理長に、朝食の用を云い遣ったら連絡を戴きたいと仰有ったそうです。繋がりますか？」

微妙超えて赤点でしょう。ウケる。

素知らぬ振りで、私は頷いた。

道程長そつだなフミ江。

取り敢えず、フミ江が合格点出す迄、接客時は春加に交代だな。

決定しつつ、執事長の張りの有る若々しい声が応答するのを聞く。若い山本の方が余程渋い声だと思うが、悪い声でも無い。

「用は？」

『お早うございます。お嬢様。お手を煩わせまして、申し訳ありません。』

こんな偉そうな口調で彼に対するのは、父か私しか居ない。姉もそうだが、彼女なら主語と述語を組み合わせるだろう。

単語のみ、主語のみと云うのは態度悪い。今の所改める必要は感じないが。

『そろそろ旦那様から定時のご連絡がございましたが、どう致しましたよう？加那子様の件ですが、お帰りをお勧めした方が宜しゅうございますか？』

多少密めく声なのは、一応主人の問題だからだろうか。

しかし……………何故、この家の人間は私に尋ねるのか。普通、その判断は父に求めるべきだろう。

「昨夜の連絡は無かったの？」

『いつも通り、0時にございました。ですが、お嬢様にお尋ねしてからと。』

「……………要らん。」

父が帰って来てても役に立つとは思えない。

『承りました。では失礼致します。』



私は脱力感を覚える。

世の中間違ってる。私を普通じゃないと世間の大人は云う。子供達も、私を『特別だから』と云う。しかし、この家に育ったにしては、私はかなり『まとも』だと思っ。

「由紀？」

「あ、はい。あ……申し訳ありません。」

手が止まっていたのを咎められたと思ったのだろう。慌てた様子で私の髪を握る。  
待て待て。

「落ち着いて。……ね？」

「は……はい。」

髪が抜けるのは嫌だ。我が家の家系に髪の薄い人間は存在しないが、義兄の妹さんが若くして育毛剤の世話になった。

その時に思った。女のハゲほど不倅な事は無い。用心するに若くはない。

「あ……あの。」

「ん？」

「いえ……申し訳ありません。」

云いかけて止められると気になるが、本人が納得するのなら言及はしない。

だが。

由紀の表情は、何かしらの補いを求めている。

本人がどう尋いて良いか悩む時は、手を差し延べるべきだろう。

毛先から丁寧に梳ずる手は気に入ってもいる。これからも、この家に居て欲しいと思う。

「思う事はね。気にせずには云えば良いのよ？私は無礼な言動は嫌いだけれど、多少の軽口や無駄話まで咎めたりしないわ。現に、お前が来る前は春加の役目だったけれど、あの娘は髪を梳き乍ら噂話に余念が無かったものよ？」

「は……………はあ。」

だからって、はいそうですかって訳には行かない……………そう云いたげな相槌だった。

仕方ないな。

「私の事はね。子供ではないと思えば良いのよ。少しばかり変わった家で、変わった子供が居ると考えるより、子供の姿をした大人だと思えば、余り困らないでしょう？」

「……………」

返事は無い。

中には、こんな子供は気味が悪いと感じる大人も存在する。この家で育ってしまったからには、仕方ない事だった。

父は、家の事に一切手を出さない。報告を聞くだけだ。それならそれで、執事長なりメイド頭なりに任せれば良いのに、それもしいい。

母の死後。あの人が云った台詞は『娘に尋け』だった。

姉は結婚したばかりだった。

家に居る『娘』は7才児。

その『娘』に指示を仰がねば為らない、使用人達の困惑は如何ば

かりか。憐れを催す話だろう。

しかし、指示を仰がれた私はもっと堪らない気持ちだった。

一種の天才だなどと持ち上げられる私だが、不覚にも気付かなかった事実が有る。

それが、形だけだと云う事実。

いや、形だけに成る筈だったって事実を。

取り敢えず父の命令だから、私に尋ねてみた。それだけの事だったのだ。

子供が対処出来る訳が無い。だから、尋ねて、命令を果たした。その後は、執事長の岸とメイド頭のフミ江が万事引き受け、取り仕切るだけだったのだ。

本来なら。

そうは成らなかった。

私は真面目に応えてしまった。

女主人として。

亀の甲より年の功。あの二人は動じなかった。若しくは、内心の動揺を押し隠した。

でなければ、マグレだとも考えたのかも知れない。

その時は。

私は母親べつたりの子供だったから、単に母の真似をしたと思われたかも知れない。

実際。真似をしたのだ。

こんな時は、母ならこうした。この場合はこうする。

私には容易く解る事だった。

二度、三度。そして更に回数を重ねれば、マグレ話では済まなくなる。

戸惑いつつも、彼らは新しい主人として、私を受け入れたのだ。

情けないったら。

子供ぶりっ子は音を立てて崩れた。

つまりは私の未熟の証明みたいなものだ。

母は私に対して何度も云っていた。

『そういう事を、人前では云わないのよ？』

母の云う通りにしていれば、私はもう少し子供らしかったらうに父の所為で、私は加速度的に子供らしさを失う羽目になった。

最近の私は開き直ったと云っても過言では無いだろう。

子供扱いして貰えない寂しさど、一目置かれた状態の気楽さと、殆ど二律背反に等しい感情が有る。

子供ぶりっ子は疲れるから別に良いけどな。家ではやっぱり寛ぎたいし。

しかし天才と呼ばれても、私の場合は単なる精神年齢の高さと云うべきもので、何かしらの分野で一家言持てる様な才能は無い。『ハタチ過ぎれば只の人』を地でイケそうだった。

いや、5年かそこらで年相応になれる気がする。

まあ、こんな事を真面目に告げれば、益々『変な子供』のレッテルが大きく貼付けられる気がするので、口にしないけどな。

階下に下りたら、姉が珈琲を飲んでいた。

「おはよ。」

「お早うございます。お姉さま。」

春加がテキパキと食事の支度をしてくれる。

「美味しい？」

「ええ。」

「私にも。」

この辺りの物の云い様は、やはり姉妹だと思う。

嫌かも。

二人して黙々と食事をしてしまった。別に私は気まずくも無いし、姉も同様だろうが、周囲は気にするだろう。少し反省した。

取り繕う様に、私はニツコリと笑って、食後のデザートを求めた。

「お姉さま。居間で戴きませんか？」

「そうね。」

取り敢えず、歯を磨いてから居間に向かうと、暖炉に火がはいっていた。我が家の使用人は優秀である。

「お姉さま。それで、お義兄さまとは今回どんな理由でケンカなさいましたの？」

「……………」

嫌そうな表情を浮かべる姉に、私はニツコリと笑いかけた。

私の笑顔は天使も斯くやと評判だ。

「お嬢様……。」

フミ江が小さく呻いた。呆れたのかも知れない。昨夜の愁嘆場の再来を予感したのだろうが、それは杞憂と云うものだ。

私は、私の笑顔の威力を正確に把握している。

姉に対しては、下手に無邪気さを追求したら、わざとらしいと怒りを買うから、容姿の愛らしさのみで勝負。

姉は私を睨み、視線を逸らせた。

「浮気をしたのよ。」

姉は白状した。

よし。勝った。

いや、勝負では無かった。

だが、姉に効くなら万人に効く。私は自信を取り戻す。

最近、木っ端微塵に打ち碎かれた自信を、かき集める私である。

アレは……特別な相手だから、気にしては為らない。

あ、姉の存在を忘れるところだった。

私は、続く言葉を待っていた振りをした。

「他には？」

「他？」

姉の眉が寄る。

「浮気だけなら、いつもの事でしょう?」

「……………子供が、出来たのよ。」

「あら、新展開ですね。」

「図らずも的中?」

無念そうに告げた姉には悪いが、私は笑ってしまった。

まあ、こういう事も有る。色々問題は有るが、予想出来ない話でも無いだろう。

実際、我が家にも存在する。父を同じくする血縁が。

もう少し気をつけて欲しいが、生まれるものは仕方ないだろう。

「誰にか…………聞かないの?」

呻く様に、姉が云った。

あれ?まさか。

「あら。浮気相手さんにかと思ったのですけど…………。」

「私によ。私が妊娠したのよ。」

その『まさか』だった様だ。

はて?ならば問題は那邊に?

姉の発言と共に、陶器が割れた音を無視して、私は考える。

「失礼致しました。」

春加と由紀が異口同音に粗相を詫びた。

フルーツを盛った器を音を立ててテーブルに置いたのは由紀。後退りワゴンに衝突して、カップを割ったのは春加。

因みにフミ江は壁に背中を凭れていた。フミ江のそんな振る舞い

は初めて見た私である。

何が、そんなにショックなのだろうか？

この話の衝撃ポイントが何処に存在するのか、私には解らない。  
私は内心首を傾げたが、取り敢えず放置した。

「お姉さま。それで、どうしてケンカに発展しましたの？」

「浮気を咎めたら……関係無いって。」

「何故ですの？」

私は首を傾げて姉を見上げた。

「勝手にしると云ったのは、君だろうって。」

姉は唇を噛み締めて、怒りを滾らせた。

私は呆れた。

「それはそうでしょう。今まで無関心な振りをしてらした癖に。そうではなく、どうして責めたんですの？浮気なんて、大した問題でもないでしょう？」

「子供が……出来るのよ？」

何故それが理由になるのか解らない。

姉は時々、意味不明な言動をとるが、まさしく今がそうだった。

私は多分独占欲が強い。誰かを愛したら、一番に愛されたい。同じ土俵に恋敵が立つ様な事態は、我慢出来ない気がする。

浮気なら良い。だが、その女性を愛するのは許せない。

嫌だな。こんな感情。想像だけでも苦しい気がする。

恋などせずに生きて行こう。うん。



まあ……だから、浮気を責める女性の気持ちは解らなくも無いと思う。

だが、子供が出来る迄は良くて、出来たら駄目とはこれ如何に？

「え……と。子供が出来たら、浮気をしては為らないんですの？」

「弥也子なら許せるの？」

「……………」

10才の子供に聞く？

皆が呆れた眼差しで、私達を見つめていた。

私は嘆息した。

「だって男の人って、浮気する生き物でしょう？」

ガタタン、と響く音。

フミ江が尻餅をついていた。大した事はなさそうなので、そのまま続ける。

しかし姉の問題発言は未だ続くだろう。だから『そのまま座つてなさい』とだけ云っておいた。

フミ江が耐え切れなくなるのも、よく解る。  
私でさえ頭痛がする。

「お父さまの所為ね。あんな男と暮らしているから、そんな妙な考えを持つ様になるのよ。」

苦々しい表情で吐き捨て、フミ江をチラリと見遣る。まるで、私の発言の所為でフミ江が倒れたと云わんばかりに。

「まあ。ご自分の事を棚に上げて、よくも仰有いますわね。」

「そのわざとらしい喋り方止めてよっ！」

「わざとらしいって……ま、良いわ。改めましょう。」

正直、姉の望むカジュアルな口調は却って面倒だ。

私は基本的にこの話し方で通してるのだが。わざとらしいのか…

……そうか。

少し傷付いた。

「で？詳しく云いなさいよ。それだけじゃ解らないわ。」

姉の里帰りは頻繁だから、砕けた口調も慣れっこだ。

特に昨夜の様な時は最初からアレで通さないと、収まるものも収まらない。

しかし毎回試行錯誤する。

難しいよカジュアル&フランク。

訳が解らない事ばかり云うし、注文は多い。姉の事は好きだが面倒な人だとも思う。

取り敢えず、姉は私の言葉遣いに及第点を与えたらしく、ボソボソと話し始めた。

### 3話 姉夫婦の関係

昨日、加那子は診察を受け、自らの妊娠を知った。

父親になる夫にも報せるべく帰宅を待っていると、彼は女性の香水の匂いをさせて帰宅したのだ。

いつも通りに嫌味を云ってしまったが、返された反撃に常ならば捨て台詞で部屋に籠るところを、加那子は踏み止まった。

「とにかく、今後は気をつけて戴きたいですわね。」

「おや。君がそんな事を気にするとは思わなかったな。私の行状になど、興味は無いんじゃないかい？」

「勿論。興味などございませぬわ。」

悔しさを押し殺し、いつそ冷ややかに加那子は告げる。

妻の冷たい物云いは今に始まった事ではないが、その見下す様な視線や態度が、不愉快な事に違いは無い。

その美貌に心惹かれた事も有るし、結婚の成り行きを知り、同情した事も有ったが、今では同情されるのは自分の方だと考える直之である。

高島家の夫婦のやり取りは、最近では遇に顔を合わせてしまったが為に行われる、冷戦状態にも似た、短い嫌味の押収に終始している。

常ならば互いに背を向ける辺りで、ソファに腰掛け語り合う態勢になったからと云って、それは変わるものでは無かった。

最早慣れ切った様子で、メイド達は仕事をこなす。

うんざりだ。と直之は思った。

「それで？奥様は何のご用ですか。君には関係の無い私の事情を聞きたい訳でも無いだろう。」

嫌味つたらしい直之の口調に、加那子の眼差しが更に冷ややかを増した。

その貌が益々美しいのは皮肉と云うものだが、冷たい美貌やり平凡な暖かい笑顔の方が、直之には好ましかった。

「貴方の事情など、どうでも良い事ですわ。私にとっては。」

「そうだろうとも。」

直之は苛立った様に吐き捨てた。そして、皮肉を込めた穏やかな声が続けた。

「お互い様と云うところだね。意見の一致を見て目出たい限りじゃないか。」

その言葉に内容など無い。単なる嫌がらせと皮肉しか、直之は口にしなくなった。

その直之を視つめ、加那子は白い美貌に怒りを覗かせて告げた。

「けれど、子供にとっては違います。仕方ない事ですけど、父親の行状は子供に影響を与えます。」

「子供？」

眉を顰めた直之に加那子は云う。

「4ヶ月です。」

「私の子だとも？」

音もたてずに、彼女は立ち上がった。  
スツと、ほんの微かに笑った唇は、けれど冷え切った怒りの証に  
他ならない。

「貴方と一緒にしないで戴きたいですわね。不愉快です。」

直之の言葉は加那子の心に刃となって突き立った。

けれども、血を流す心は端から伺えるものでは無い。

そこで泣ける性格ならば、ここ迄二人の仲は冷え切る事にはなら  
なかつたろう。

それでも、夫の前にこれ以上居ると、何を口走るか解らないと加  
那子は思った。

冷静な態度を保てる内に、彼女は実家に帰るべく、家を出たのだ。

心のまま、取り乱して泣いてしまえば良かったのに。

その場に弥也子が居れば、そう忠告しただろう。

端から見れば、これ以上ない程に冷静に映った彼女の態度。それ  
は、どう考えても彼女にとって、そして直之にとっても、不倖でし  
か無かった。

姉の話は、都合の悪い発言を隠しているかも知れない。勿論、義  
兄の心中を慮る筈も無く、云われた台詞だけを不快を込めて口にし  
た。

だが、誉められたものでは無い発言を、義兄にさせたのは姉の態  
度だろう。姉が語らない部分こそが、裏を悟らせるに足る。

私は多分。当事者である姉よりも、その状況を理解したのでは無

いだらうか？

こんなに、客観性に欠けた女性だったかな？賢い姉は何処に行っただらう？

私は、姉を変えてしまった『恋』だの『愛』だのが、ちよっぴり怖いと思った。ちよっぴりね。

しかし。

いくら何でも……と思う。

姉の話が終わると、私は嘆息した。

「莫迦じゃないの？」

「それは勿論、あの男に対する台詞でしょうね？」

私の呆れた口調に、姉は硬い声で応じた。

「義兄さんの何処が悪いの。当たり前でしょう？姉さんが莫迦なのよ。」

「もう一度、云ってご覧なさい。」

怒りに震える声は、冷たく冷える。

彼らに見抜けないのも無理は無いけれど、私には生まれた時から付き合いが有る。

これは、悔しくて泣きそうな顔だ。

「解ってる癖に。どうして態度改めないの？何度云ったら解るの。今なら間に合うのよ？義兄さんに謝って、好きだって云えば良いだけでしょう？」

「……………」

キリキリと睨み付けてくる眸に溜息が漏れた。

「自分の損になるだけなのに。」

理解するのは不可能だ。

私は頭を振って肩を竦めた。

怨みがましい視線を無視して、フルーツを摘む。

さて、どうしたものかと考える。

「で、いつまで此処に居るの？高木さんや良子さんは姉さんの事を解ってるし、義兄さんとは滅多に逢えないんだもの。気まずい訳でも無いでしょう？」

召し使い達の大半は、姉に好意を抱いている。高島家に代々仕えて、直之に絶対の忠誠を誓っている時代錯誤な人達も、私と話をする姉を見れば大体の事情を察する。

私は誤解され易い姉の為に、姉を頻繁に訪ねたさ。

しかし、最初は仲を取り持つ努力を惜しまなかった彼等も、最近では諦め切っている。

姉の強情は一筋縄ではいかないのだ。

いつか、もしかして……と僅かな希望に縋るのみの彼等である。

私があの人に度々通わなければ、未だに使用人からも誤解されてたかも知れない姉である。

「ねえ。考えても見て？」

同じ事を繰り返すのも、疲れてしまう。

「何処の世界に、顔突き合わす度に嫌味を云う奥さん、愛せる男が居ると思うの？」

「あの人だつて云うわ。」

「姉さんが云うからでしょう。」

姉はそつばを向いた。

拗ね切っている。

「笑顔ひとつ浮かべない。たまに逢えば嫌味の押収。加えて実家の権威を振りかざし、おまけにもっと稀な夫婦生活の翌朝に云われた台詞はケダモノと来た。」

ギョツとした様に振り返る姉に、唇の端を吊り上げて問う。

「いったい、何処に惚れる予知が有るの。」

「どうして知ってるのよ。直之に聞いたの？」

「メイドよ。誰かは聞くな。姉さんの事を心配して、家に来たのよ。信じられない事するわね。私は情けなかった。」

キツパリ告げれば、姉は居心地が悪そうに眸を逸らした。

「あのねえ、酔つてたからって手を出して、奥さん相手に謝る人つてさ、とつても礼儀正しいと思うのよ。私は。」

俯いたまま、姉は顔を背ける。

「その夫に対してケダモノ……。云うに事かいて、よくもまあ。」

そこで自らも謝罪して、互いに歩み寄れなかったのかと思う。



情けなさ過ぎる。

「それで出来た子供に対してだよ？多少イヤミを云って何が悪いって、私は思うよ。」

私がそこ迄知っているとは思わなかったのだろう。姉は首を竦めて微動だにしない。

「おまけに子供が出来たから行状を改めろ？我が姉乍ら……………」

みな迄云わず、そつと息を吐いた。

云い過ぎた。と、少し…………いや。かなり思う。

姉を泣かせるまで追い詰める気も無い。

しかし、義兄の立場を考えれば、これくらい当然な気もする。

「少しは反省してる？」

それでも、優しい声を出して問い掛けた。

「……………はい。」

「ま、好きなだけ滞在なさいな。帰りたくなったら、ちゃんと協力して上げるし。此処も、姉さんの家だからね。」

「ゴメン……………なさい。」

「うん。私もゴメン。云い過ぎたね。姉さんも、例え全然実にならぬにしろ、努力の影も見えないにしろ、頑張ってはいるんだものね。」

消え入りそうに萎れた声に、私は寛大を示したが、扉の陰から「惨い……………」と小さく聞こえた。

当の姉も恨めしそうに、半分俯いたまま視線だけが私を見上げた。

かなり控え目に云ったつもりですけどね。と嫌味ったらしく云ってやりたいが、グツと堪えた。

この姉に引き比べて、何故私の性格がキツイなどと云えるのか。私には皆目解らない。この人の行状を考えて物を云って欲しいし、姉自身には反省を促したい。

それとも、私はやはり子供で、考えなしだったりするのだろうか？ 大人には難しい事を、やれと云い張る子供なのだろうか？ 未だ、大人でない私には判別し難い問題であった。

午後を回った時間に、私は家を出た。

何処に行くのかと姉に聞かれ、友人の家と応じたのは思いやりと云うもので、事實は義兄と逢う為である。

義兄に逢う時の常で、車は先に帰した。しかし今日は、玄関まで送って貰うのは不味かろう。

門の手前で義兄には帰って貰う事にしよう。等と、私は帰宅時の心配りをしつつホテルのロビーにて義兄を待った。

「やあ、お姫様。また待たせちゃったね。」

済まなそうに謝る義兄に、首を振って立ち上がる。

「お義兄さま。緑さんと喧嘩なさった？」

「……………何故？」

笑顔が引き攣り、義兄は僅か乍ら狼狽した。その頬に目立つ程では無いが、痣があるのだ。転んだり、アクシデントに依る類いの傷で無いのは、何となく解ってしまう。そして、姉との冷え冷えとした諍いで、怪我をする筈もない。

それに、昨夜は香水を香らせて帰宅したと云うではないか。じっと見上げる私に、義兄は溜息を零した。

「どうして解るのかなあ。」

穏やかな優しい声が、諦めた様に云って歩き出す。差し延べられた手に掴まり、私は尋ねた。

「緑さん、お元気？」

「ああ。いらぬ程ね。」

うんざりした声に同情を覚えた。彼には女難の気が有ると私は考える。

だが、これは希望だ。姉の為には、彼が他の女性と倅せに成るのは歓迎出来ない。

「食事とお茶はどちらにしますか。お姫様？」

「お茶。」

「じゃあティー・ラウンジにしようか。」

こつくり頷いた。

今日は少々食べ過ぎた気がするので、お昼は遠慮したい気分だった。遅い朝食だったし。

「何が良いかな。お茶が済んだら服でも見に行こうか？それとも玩具おもちゃが良いかな？」

「ううんと……。本が良いかも？」

「また僕に理解出来ない物を買ったね？」

少し哀しそうな表情で、義兄が云う。

いや。あれは。あの作者があんな話を書くとは、私も……。まあ義兄との親しみが増したから結果オーライだ。

義兄は私の過失を揶揄う種にしたらしい。

それ以来、私は遠慮なく読みたい本を手にする事にした。

結果オーライだけど……。ちよっぴりム力つく。

悪かったな！変な趣味で！！

ふうつとか、わざとらしい溜息吐くし。

まあ、良いけど。

別に良いけど……。

私は多分、揶揄われるのは好きでは無いと知った。

でも義兄の事は結構好きだから許すよ。うん。

「お義兄さま？少しばかり失礼かも、とは思われませんか？」

私は一応の反論を試みる。愛らしく見えるだけと知りつつ、柔らかい口調で、少し睨む様に見上げた。

案の定、義兄は可愛くてならないと云わんばかりの眼差しで私を見た。

気安い云い合いも楽しいらしく、気取らない笑顔が浮かぶ。

「でもねえ、10才の子供が読む本でも無いでしょう。君のは。」

「大人も子供も楽しめる本なら、無駄に棄てる事も無いでしょうし、良い事ですね。」

澄まして応えれば、クスクスと笑う義兄。

「だから、子供は読まないって。」

「読んでますわよ。」

「だから理解出来ないと言ったんだらう？時々本当に理解出来ないものも読むし。」

後半は少々困惑気味に云われた。はて？私は専門書の類いは流石に強請った事は無いのだが。

「女の子同士の恋愛小説なんて、今から読んでちゃダメだよ？」

的は私の失策だったよ。

じゃあ最初の話題は何に対する感想だったのさ？

「う……………！あ……………あれは。」

「あれは？」

多少狼狽した私に、義兄は微笑んだ。割かし食えない人だったりするのである。

「今がダメなら、いつなら宜しいんですの？」

「……………ううん。」

私も反撃は忘れない女です。子供相手に揶揄いたおす事など出来ないと思し召せ。

なんちゃって対決だけだな。

今、隠す事なく多少はうろたえて見せた様に、義兄に対する私は、出来るだけ素直に心を曝す事になっている。

義兄は素直な人間が好きだ。彼は鏡の様な人で、相手を素直にさせる穏やかな人柄は、だが頑なな相手には幾らでも非情になれる一面も持つ。

少なくとも仕事上は。

それくらいでなければ、父が姉の相手に選択する訳もない。

私は、彼の優しい人柄を愛してるから、そんな一面と遭遇する気は無かったのだ。

実際。

姉がいつ見限られるか、私は気が気では無い。

今なら間に合う、が、義兄の心境が変化すれば、姉がどんなに素直になっても駄目になる日が、いつかは来るだろう。

現に、義兄は姉に対抗して嫌味を発する様になったではないか。非情な顔はプライベートでは見せられた事がないと云う話だが、この先もそうだとはい限らない。

私は姉の為に、我が家の為に、そして義兄の為に祈る日々である。

どうか義兄が優しい内に、姉の態度が改まります様に。

義兄は私の心配も知らず、呑気に考える。

解答を思い付いたらしく、ポンと手を叩いた。

「16才ってのはどうだろう?」

「その心は?」

「親の許しが有れば、結婚も出来るし。」

「普通、女の子同士の結婚を許す親がおりますかしら?」

困惑混じりに首を傾げて見せたら、義兄は人差し指を立てた。

「君のお父さん辺りは許すタイプと見た。」

それはまったく凶星に近くて、私は吹き出してしまった。

二人して笑っていたら、アイスクリームのクレープが来た。義兄には珈琲。

冬の最中ひまにと笑われたが、暖房が効く室内で食べるのが良いのだ。私は冷たいスイーツを堪能した。

此処のケーキやパフェは絶品だといつも思うが、アイスクリームも当然の様に美味しい。

至福かも。

私は基本的に食いしん坊なのだな。

「美味しそうに食べるねえ。」

スイーツにうっとりしている私を見て、義兄は嬉しそうに笑う。美味しそうに物を食べる人間を見るのは、彼の楽しみのひとつである。

良い趣味だ。うん。

此処で、姉さまも美味しそうに食べる等と云えば、機嫌が悪くなるかなあ、やっぱり。

本当の事だけれど、義兄にとっては偽りなものね。

「赤ちゃんが、出来たんですってね。」

「……………加那子さんは、やはり塩野の家に帰ってるのか。」

少しばかり苦々しい口調と表情だった。困惑は一切なし。怒り少々、根っこは……苛立ち……かな？

ふうん？やっぱりなあ。

「お義兄さまは、姉さまの事がお嫌いではないのね。」

苛立ち怒ったりはしても、嫌悪はしない。

一度惹かれた相手は、嫌いには成り切れないものなのだろうか。だとすれば世の中もう少し倅せなカップルで溢れてる気がする。

これは義兄の寛大さと云うものだろう。

そう考えると、却って気の毒な感じがする。

「嫌いじゃない？」

ムツとした様に義兄は繰り返す。「冗談だろ？」とでも云いたげな口調だ。

彼は思い切り否定しようとして、私の立場を思い出したらしく、様々な言葉を口にしたいたい気持ちを堪えた様だった。

別に良いのに。

「疎ましいとは感じてても、嫌悪なさってはいないのね。」

「何を云って……………」

義兄は戸惑う表情を見せて、口籠る。

反論するかと思ったが、子供の戯言を怒るでも無く考え込んだ。

義兄は少し哀しそうに笑った。

「そうかも知れない……とは思っけどね。彼女があのままなら、愛



せないのも確かだよ。」

私はびっくりした。

眸を丸くして、マジマジと義兄を視つめたと思う。

スプーンを口から引き抜くのももどかしく。

「愛する気は有るんですの!?!」

辺りを憚りつつも、勢い込んで尋ねた。

やっぱり今なら間に合うのね!?!

「……………君は。」

眉を寄せ、困った様な顔をして、義兄は長い長い溜息をついた。

「君ねえ。」

「はい。」

ドキドキと言葉の続きを待つ私に、義兄はまた溜息を零して苦笑した。

テーブル越しに腕が延ばされ、掌がそっと頭に触れた。

びっくりした。

私の頭を撫でようなどという人が、未だ存在するとは。いったい何年振りだろう。

キョトンとした顔を、していたかも知れない。

義兄は眸を瞬く私を見て、優しい眼差しで困った風に微笑した。

「そうやって子供の顔をして。君が未だ10才の子供だというのは、

一種の犯罪だと思っね。」

犯罪と云われても……。

それは私がどうこう出来る問題では無い。

その言葉自体は嫌な感じだが、口にした義兄の表情は優しい。

別に、今更気持ち悪い子供だと思っ風でも無いし、そんな人でも無い。

「早く大人になりなさいね。この手の話は、もう少し……場所柄と云っものが有ってね。」

「……TPOがなってないっ事？」

大人って解らない。

なら、どんな場所なら良いのだらう。私の困惑に義兄は頷く。

「そう。こんな明るい場所で、昼間っから話す事では無いね。例えば、静かな店で、酒でも酌み交わしつつ、静かな声で語り合っものだ。」

「そんな相手居ないのに？」

「う……それはねえ。……居る様には見えない？」

義兄は情けなさそうに尋いて来た。いや。心配しなくても義兄の人格に問題は無い。

友人も沢山居るだらうと思っ。

ただ、そうして愚痴を聞いてくれる相手が居ないだらうと気付いたのは、他ならぬ義兄の発言に因る。

どうやら無意識らしいが、「と、思っよ？」等と自信が無さそうに呟いたから、居ないんだなと思っただけだ。

義兄が気付かない発言を、親切に教える事はしない。  
手の内を隠すのは私の第二の習性だった。

人間と云うのは単純なもので、隠し事が通じない相手だと思つたら、そもそも隠す事自体を止めてしまう場合が多々有る。

それが無意識の場合は、やっぱり隠せないと認識を深める事になる。

義兄も、私を10才児と油断して嵌まった罠だった。

うん。大丈夫。別に情報悪用しないから。今のところ夫婦の話題しか無いから、しようとしても出来ないけど。

しかし、子供の言葉にそんなに落ち込まなくても………可哀相になつたから云つた。

「ええと、いらしたら……私相手に、そんなお話をなさらないかな………」と。

「そう。まあ、それはそうなんだけど……。」

納得してない口調だった。俺って人望無さそうかな……等と呟いたりしている。

私は、もう少し適当な理由をでっちあげる修業の必要性を感じた。義兄の名誉の為に云うなら、この人は人望を誠意で勝ち取るタイプだった。仕事では非情な一面を持つと云つたが、それさえも被害を広げないタイプだと父が云っていた。

『性格は甘ちゃんだが、為すべき時は完膚なき迄に叩く。一点集中攻撃型だな。後のフォロワーも完璧だ。多分、自分の名を守る為では無く、周囲の為にしている様だが……まあ結果が同じなら良いだろう。』

父の評価は身も蓋も無かった。  
だが、良い人なのは絶対だ。

あれだ。

相談事とかされて、親身に聞いて上げるタイプの人よね。

多分、この人が愚痴を零す相手が居ないのは、頼られる所為もあるに違いない。

あ、これをそのまま云えば良いのよね。

「お義兄さまは、ご自身が愚痴を零されるより、聞いて差し上げる人に見えるし。」

このフォローは悪くなかったらしい。

事實は強いよね。

嘘はやはり見破られるものでしか無い。

私が下手なだけかも知れないけど……。

そう？等と安堵すると共に、満更でもなさそうな義兄を視つめて私は考えた。

しかし。

子供の発言に振り回され過ぎだろう。

私の周囲の人間は、大抵私を買い被るが、義兄も大概その傾向が深い。

確かに私が誘導したのも有るが……所詮子供だから、そんな大した人間でも無いんだけどな。

普通は子供の意見など聞き流すものだが、それをしない周囲の大人たちは、それだけ人間が出来ていると云う事かな。

それとも変な大人が私の周囲に多いだけだろうか。  
私の判断を迷わせる議題だが、今考える事はそんな問題では無かった。

姉とこの人の結婚生活だ。

少なくとも希望が無い訳ではないのだと思えば、私はやっぱり嬉しかった。

元々、姉の為にこの人に気に入られ様としたのだが、義兄の人柄は私の好意を本物にさせた。

勿論、姉の事は大好きだから、その二人が仲良くしてくれるなら、それに越した事はない。

姉には、もう少し素直になって貰わねば。

そんな事を考えつつ、私は帰宅したのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1100z/>

---

仮題 弥也子～美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ塩野弥也子～

2011年12月10日23時53分発行